

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)

2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
哲学コース	岩田 圭一	イワタ ケイチ	古代ギリシア哲学、とくにアリストテレスの哲学を研究している。アリストテレスの『形而上学』、『魂論』、『ニコマコス倫理学』などの読解を通じて、存在、自己認識、幸福について考察している。アリストテレス哲学とのかかわりで、プラトン中期対話篇におけるイデア論、初期対話篇における自己知の問題にも関心がある。
哲学コース	鹿島 徹	カシマ トオル	哲学
哲学コース	小島 雅春	コジマ マサハル	現代英語圏哲学の研究に依拠しながら、感情を「理解」することを目指す。この「理解」の先に、感情の治癒に関わる行為としての哲学の可能性を展望する。
哲学コース	小林 信之	コバヤシ ノブユキ	美学研究、感性文化論、ハイデガーを中心とする現代哲学研究。具体的には、知覚や感情の現象学的研究を主要フィールドにしつつ、視聴覚文化、身体や死の問題にも目を向けてきた。また西田幾多郎、九鬼周造、三木清らの近代日本哲学における美学的・文化理論的思想についても研究を進めている。
哲学コース	西山 達也	ニシヤマ タツヤ	フランス近現代哲学研究。20世紀のフランスにおけるにおける様々な思想潮流(現象学、生の哲学、実存主義、構造主義、ポスト構造主義、等々)を研究対象とし、とりわけ現代哲学が言語の問い(言語の複数性および翻訳をめぐる問い)にどのように取り組んできたかに関心をもっている。また、20世紀のフランス哲学は、他の人文・社会科学の知、芸術、宗教、等々とクロスオーバーしながら展開しているが、こうした複合的な現象も研究の対象としている。
哲学コース	御子柴 善之	ミコシバ ヨシユキ	研究上の専門分野は、ドイツ近現代哲学ならびに倫理学である。ドイツ近現代哲学では、特にカントの実践哲学について、道徳の最上原理の提示からその体系的展開にいたる全体像を研究している。また、カントとその周辺哲学者における「意識」の理論を検討している。倫理学では、現代社会の諸問題に対峙する倫理学を(世俗化した社会における)社会倫理学として構想するのが課題である。これらの研究を通して、現代社会の倫理的諸問題を古典的な近代哲学との対話において解明することを目指している。また、ドイツならびに日本の研究者たちと共同して、カントの世界市民概念を手がかりとして、「グローバル化時代における倫理学」を多様な観点から研究している。
哲学コース	村松 聡	ムラマツ アキラ	①生命倫理学を中心とした応用倫理学が研究テーマ。近年は徳倫理の可能性とその復権を研究の中心としている。②パーソン論を中心として、人間理解が研究テーマである。とくに他者論、身体論の二つの点から人間の独特な存在の仕方を探求している。
東洋哲学コース	大久保 良峻	オオクボ リョウシュン	漢文文献を中心に仏教の教学研究を行っている。特に平安仏教、すなわち複合的な要素を持つ天台宗と、密教を基軸とする真言宗の教学に注目している。それらは中国仏教とは直接的に繋がっているため、中国隋代や唐代の仏教も研究領域となる。具体的には天台学や密教学が中心になる。そして、日本天台では最澄以来、法華教学・密教・禅・戒という四宗の相承が言われ、後には浄土教や山王神道も重要な法門となるように、諸分野の研究も課題となっている。その他、中古天台の本覚思想と言われるような天台教学を根幹とする現実肯定思想の検討もしている。比叡山出身者の多い鎌倉時代の仏教やそれ以降の教学展開も解明すべき課題となっている。
東洋哲学コース	森 由利亜	モリ ユリア	中国近世の神仙信仰、全真教、道教、内丹思想などを専門に研究する。特に、明末清初から民国初期に至る全真教の展開と、その伝統の再構成において、呂祖を信仰する数々の扶鸞結社が関与している事実を集散的に指摘してきた。『太乙金華宗旨』や『道蔵輯要』といった文献がまさしくそうした結社の中で作られてきた事実も、こうした研究過程で明らかにした点である。現在は、重刊『道蔵輯要』の成立を調査する過程で、清朝から民初にいたるまでの四川での全真教の展開にも興味をもっている。現在は、伍守陽の諸著作の研究を基礎に、近世内丹道の展開にも視野を構築していく過程にある。
東洋哲学コース	山部 能宜	ヤマベ ノブヨシ	インド大乘仏教の学派の一つである唯識学派の教学と中央アジア(新疆)における禅観の展開を研究テーマとしているが、そこに通底するキーワードは禅定である。インド唯識学派の研究においては、禅定の実践における身心の相関関係に特に注目し、本学派最古の教義文献である『瑜伽師地論』を文献学的に分析することによって、我々の身心をつなぐ生理的・心理的基盤としてのアーラヤ識説を実践的観点から解明することを目指している。中央アジアの禅観の研究では、文献学的手法とフィールドワーク的な手法を併用し、美術史や考古学的な成果も参照しながら、学際的な観点から往時の修行者達の実践の総合的な解明を試みている。
東洋哲学コース	吉原 浩人	ヨシハラ ヒロト	日本宗教思想史、東アジア文化交流史専攻。日本の平安時代から室町時代に至る思想・宗教・文学全般と、中国・朝鮮半島の思想・宗教・文学との関係を考察している。特に、勸学会を中心とする摂関期の宗教・文学と白居易の関係、永観・大江匡房を中心とする院政期の宗教思想・文学、八幡信仰・熊野信仰・伊勢信仰などの神社信仰、本地垂迹説、神観念、浄土教を中心とする仏教学、寺社縁起と霊場信仰、中世神話と中世神道、説話文学、仏教文学、和漢比較文学、絵解きなどのテーマで研究を行い、論文執筆を行っている。また、これらの研究分野において、学生の指導を行うことができる。
東洋哲学コース	渡邊 義浩	ワタナベ ヨシヒロ	専門は、中国古代思想史。これまでは、三国時代の研究を中心としており、映画「レッドクリフ」の日本語版の監修や、吉川英治『三国志』の解説などを行っている。研究を進めるにつれ、時代が広がり、関心が思想史を中心とするようになり、現在は、いわゆる「諸子百家」と呼ばれる先秦の思想家たちから、唐代の儒教・仏教・道教まで、中国古代思想史全般の研究をしている。最近では、『論語』や新出資料などに関心を抱いているが、「三国志」の研究を辞めたわけではなく、事務局長として三国志学会を主宰し、その普及にも努めている。
心理学コース	小塩 真司	オシオ アツシ	パーソナリティなど人々の心理学的な個人差に注目し、その測定方法の開発や適応・不適応との関連、また発達過程に注目して研究を行う。
心理学コース	神前 裕	コウサキ ユタカ	動物の実験的研究を通じて、学習・行動の心理学的機構および神経科学的機構を明らかにすることを目指しています。学習とは経験を通じて認知・行動を適応的な形に変容させる過程で、意識的・無意識的な形で行動を形成・制御することから、ヒトを含む動物の行動を理解する上で根本的に重要な心理学的過程です。学習心理学分野における伝統的な研究手法(例えばバヴロフ型条件づけや道具的條件づけ)および理論的な発展と、脳内の神経生物学的基盤とを結びつけることで、学習・行動のメカニズムを統合的に説明することが目標です。現在のところ、随意行動(道具的行動)の二重制御過程、時間および空間学習、薬物依存、社会的学習などを主な研究対象にしています。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
心理学コース	越川 房子	コシカワ フサコ	専門分野は、心理療法における認知行動的アプローチである。認知行動的アプローチは、1980年代にはいって、行動的アプローチと認知的アプローチを統合して生まれた比較的新しい心理療法の技法である。特に、うつ病と不安に関する理論研究、治療効果の実証研究において優れているが、最近では、犯罪者の再犯予防介入に積極的に導入されたことでも知られている。研究指導領域は、認知行動的アプローチの効果研究、アセスメント、介入技法の開発、病理論、日本における適用の問題、およびこの分野で近年注目を浴びているMindfulness-based Cognitive Therapy の主要技法である瞑想をはじめとした東洋的行法の理論と効果研究などである。
心理学コース	竹村 和久	タケムラ カズヒサ	「担当者の専門研究分野は、社会心理学、行動意思決定論、経済心理学である。特に、社会的状況における人間の判断と意思決定の定性的分析、数理モデル構成、計量的分析を行っている。最近では、潜在的連想テストによる社会的認知研究、過程追跡技法による多属性意思決定過程研究、状況依存焦点モデルによる意思決定分析、描画の画像解析研究(テキスチャー解析、特異値分解、フーリエ解析、ウェーブレット解析など)、社会的規範意識と価値の社会調査研究、アイカメラを用いた意思決定における選好形成過程の研究、社会的変化検出についての数理計量分析などをテーマとしている。 応用分野としては、マーケティング政策、経済政策、リスク・コミュニケーション、社会的合意形成などになる。また、理工学系、医療系、社会科学系の研究機関との共同研究も、行っている。」
心理学コース	豊田 秀樹	トヨダ ヒデキ	心理計量ゼミでは、心理学を基本としながら、理論と実践の双方に同程度の重きを置いて、データ解析マインドを養います。データ解析とは、客観的なデータから、現実的な要求に応えるための知見を得るための学問です。また情報化社会に対する豊かな感受性を養い、データ解析に必要な計算機の知識を身に付けます。実社会に目を向け、マーケティング・サイエンスをおもな活動領域として、広い意味での心理統計学を研究します。就職の面接で「大学院時代に何を勉強しましたか」と尋ねられたら「心理学を基本に据えたデータ解析を勉強してきました」と胸を張って応えられるようになってもらいたいと願っています。
心理学コース	日野 泰志	ヒノ ヤスシ	文章を読む際、その文章を構成する語の意味が復元されなければならない。語の意味を復元するには、視覚的に与えられた情報をもとに、私たちが保持している語彙知識を検索する必要がある。語の綴り・発音・意味などの語彙知識は、どのような形式で保持されているのだろうか。また、これらの語彙知識を検索するプロセスはどのような特徴を持っているのだろうか。私は、心理実験やコンピュータ・シミュレーションを通して、このような語の読みに関する諸問題を研究している。こうした研究を通して、語の認知プロセスの解明ばかりでなく、人が持つ情報処理システムの構造や特徴を理解することを目指している。
心理学コース	福川 康之	フクカワ ヤスユキ	ヒトの心身の健康には、ストレス、性別、パーソナリティ、社会的ネットワークなど、様々な要因が関係している。当ゼミでは、これら健康関連要因の諸機能について、進化や適応の概念を視野に入れながら研究を進めている。さらに、その応用としてのストレスマネジメント方略や健康行動促進のためのプログラム開発なども行っている。特に、高齢者を対象とした研究においては、健康長寿やQOLの向上をもたらす心理学的要因の解明を目指している。
心理学コース	福澤 一吉 (学生募集なし)	フクザワ カズヨシ	脳損傷による認知活動の選択的障害を研究するねらいは健常の認知過程の理解と、認知理論に対する生物学的制約条件の提示である。認知神経心理学は健常の認知理論を神経心理学的症状の説明に適応し、病理と健常の認知過程の理解を試みる脳神経科学である。福澤ゼミでは脳損傷に由来する書字運動の障害(失書)、行為障害(失行)の背景にある運動の問題点を運動の計算理論モデルを背景に解明することを進めている。
心理学コース	藤野 京子	フジノ キョウコ	非行現象とそれ以外の不適応行動・症状とを比較して、その類似点・関係性や相違点を研究したり、上述のような不適応行動・症状を示さない者との差異を研究している。なお、不適応行動・症状とは、個々人の問題のみに帰することはできず、社会との相互作用の中で生じるものであることから、犯罪学などの観点をも取り入れて検討を行っている。このほか、非行をはじめとする不適応行動・症状を示す者への効果的な支援や予防策についても臨床心理学的見地から研究している。
心理学コース	松本 芳之 (学生募集なし)	マツモト ヨシユキ	社会的存在である人を心理学の視点から考察するために、社会的紛争場面における人々の行動を中心に研究してきました。中でも、場面状況を利用することで、自分の主張や要求の正当性を相手にどう理解させるかが、紛争の推移や解決の過程に大きな影響を及ぼすという点に焦点を当ててきました。それらを研究するための方法として、実験と質問紙調査以外にも、内容分析、質的分析、実験の代替法としての役割演技法などの多様な手法を試みています。
心理学コース	宮田 裕光	ミヤタ ヒロミツ	専門分野は、身体心理学、認知心理学、心身論です。近年は、呼吸や身体への気づきを基礎とする東洋的な実践への熟達による心身の変容とその機序について、質問紙調査、行動実験、生理計測などの複数の方法を用いて研究しています。具体的な研究対象には、ヨーガ・瞑想、武道、仏教、マインドフルネス、整体・東洋医学、速読、伝統芸能などが含まれます。こうした諸実践の一人称的体験と、実証研究による三人称的知見とを、より高次元統合的視点から融合させることが研究の目標です。これらのほか、行動計画、問題解決、洞察、無意識的処理などの高次認知能力に関わる実験的研究も、成人、乳幼児、および鳥類を含む幅広い研究対象で行っています。
社会学コース	池田 祥英	イケダ ヨシフサ	フランス社会学説史、犯罪学
社会学コース	浦野 正樹 (学生募集なし)	ウラノ マサキ	都市社会学、地域問題、災害社会学。 ここ数年は、多様な住民階層問題やエスニック・プロブレムズ等の、都市の社会的構成の複雑さに起因する社会問題に焦点をあてながら、都市の社会構造を考察することに主眼をおいて研究を進めている。なお、地域問題に接近する時の視点としては、今まで、〈都市－農村(中央－地方)〉関係、〈先進国経済－第三世界〉関係、近代化のプロセスと都市の歴史的発展、現在の日本の都市が抱える諸問題(資源エネルギー循環、都市災害、土地住宅問題等)を重視して研究をすすめてきている。
社会学コース	大久保 孝治	オオクボ タカジ	個人が自分の人生を語る(告白する)という行為自体がすでに近代的な現象であり、「人生の物語」はその時代その時代の社会(あるいは国家)のありようを反映していると考えられる。近代日本人の「人生の物語」(生き方をめぐる規範と語り口)の生成と変容の過程を、ポピュラーカルチャーやライフストーリー(口述生活史や自伝、インタビュー記録など)、並びに社会意識調査のデータの分析を通して、明らかにしていく。
社会学コース	岡本 智周	オカモト トモチカ	教育社会学、共生社会学、歴史社会学、ナショナリズム研究、社会意識研究。研究の主軸は、①ナショナリズム論と②共生社会論に据えている。①においては、世界をネイション単位で認識しようとする観念自体を研究対象とし、現代社会におけるその生成・維持・変容に対して、学校教育をはじめとする人間の社会的行為がいかに関与しているのかを理解することを目的としている。②においては、ナショナリズム・エスニシティ、ジェンダー、身体、世代、階級・階層の相違をめぐる社会的葛藤・対立の分析と、社会的共生のための理路と資源の探索を行っている。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
社会学コース	草柳 千早	クサヤナギ チハヤ	「相互作用としての社会」という方法的視点から社会問題、社会関係、自己、身体等の諸問題を研究する。その一環として、1)個人的とされるさまざまな問題がよりマクロな社会問題へと媒介されていく過程の理論的・経験的に研究、2)間身体的な過程としての相互作用分析等をすすめている。
社会学コース	嶋崎 尚子	シマザキ ナオコ	社会学の分類にしたがえば、家族社会学、ライフコース論、社会変動論、歴史社会学といえる。社会的分析次元間の連結を目指して理論的・方法的・実証的研究をしている。空間的には、マクローミクロの連結であり、時間的には、時代・コーホート間の比較である。
社会学コース	竹中 均	タケナカ ヒトシ	広い意味での比較社会的なアプローチに関心がある。このアプローチ自体は広範な適用範囲を持つが、興味を持っているのは、比較社会的な視点から自閉症をめぐる問題を論じることが出来ないだろうかという点と、民藝と呼ばれる工芸文化をやはり比較社会的な視点で論じられないだろうかという点である。両者は全く別物に見えるが、どちらも、今ここにある社会のあり方を比較のパースペクティブの中で見直したいという趣旨では通底していると思われる。
社会学コース	田辺 俊介	タナベ シュンスケ	政治社会学、ナショナリズムと政治意識に関する経験的研究、社会調査方法論
社会学コース	津田 好美	ツダ ヨシミ	専門は、社会階層論、老年学です。特に社会階層に関する問題について、理論的・経験的に研究を行っています。具体的には、高齢期における生活格差をめぐる問題について、過去の最長職や家族関係、社会関係資本、ライフスタイルや意識等に注目し、研究を進めています。近年は、関東近郊の階層構造に関するプロジェクトに参加し、都市と階層構造についても研究関心を深めています。
社会学コース	土屋 淳二	ツチヤ ジュンジ	専門分野:社会学(社会学理論, 集合行動論, 社会変動論, 産業構造論), モード論(ファッション・身体・アイデンティティ研究を含む)
社会学コース	山田 真茂留	ヤマダ マモル	理論社会学、組織社会学、宗教社会学、集合的アイデンティティ研究、現代社会論、現代文化論
教育学コース	梅本 洋	ウメト ヒロシ	教育哲学(特に教育における価値・規範にかかわる諸問題, 教育行為論, 教育学的知識論, 教育論言説における言語使用の問題など)および教育思想(特にルソー, ペスタロッチ, フレーベル, デューイなど西洋の近現代の教育思想)。
教育学コース	沖 清豪	オキ キヨタケ	高等教育論(教育社会学)および教育制度・行政学(イギリス教育改革)を主たる研究領域とします。高等教育論については、教育機能をめぐる諸改革(大学の教育機能評価・初年次教育・大学認証評価・継続短期高等教育の研究等)の調査研究を軸としつつ、特に私立大学の機能変容(職員の専門職化の可能性と課題、高大接続改革、Institutional Researchの導入)や学生支援のあり方の転換を研究しています。イギリス教育改革については、1980年代以降の高等・継続教育改革、および学校評価制度等について研究しています。
教育学コース	細金 恒男	ホソガネ ツネオ	教育政策、学校制度の研究:日本の中学・高校制度改革, 中高接続問題, イギリスの中等教育・職業訓練システムの改革(地域と教育)研究:戦後日本農村の変容と学校教育の関係, 地域開発問題と教育, 農と農村社会のもつ教育力, 社会的排除(social exclusion)問題と教育, 等に関する研究。
教育学コース	村田 晶子	ムラタ アキコ	社会教育学専攻。成人の学習論, 近代日本社会教育史研究を主たるテーマとして研究している。成人学習論研究では、社会教育実践に関与しつつ主に成人女性の教育・学習の歴史と学習論の研究を中心としている。さらに社会教育職員・対人援助職の専門的力量形成の実践的研究を行なう。研究指導においては、社会教育・成人の学習の実践研究を軸とし、母子・父子関係論, 家庭教育論, ジェンダー, セクシュアリティの議論を視野に入れて指導を行う。
教育学コース	山西 優二	ヤマニシ ユウジ	国際教育学。 国際教育・国際理解教育・開発教育の実践研究及び理論研究。 地域や文化、参加型学習、教材などの観点からみた国際理解教育・開発教育に関する研究。 開発と教育に関する研究。 地域にみる国際交流・国際理解・国際協力の関連に関する研究。 NGO による教育協力・開発教育に関する研究。
日本語日本文学コース	池澤 一郎	イケザワ イチロウ	日本近世文学を専攻する。特に近世から近代にかけての邦人の手に成る漢詩漢文の解析に研究が集中している。また漢文戯作から洒落本、黄表紙、読本といった近世後期の小説の史的展開にも関心が及ぶ。漢詩文プロパーではなく、俳諧や和歌など他の韻文作品との関係、散文作品における引用漢詩文の機能などに興味をいだき、いくつかの論をなしている。近時は掛け軸などの草書体の漢詩文を読む機会が多く、日本文学研究、中国文学研究におけるこの分野の遅れを痛感している。
日本語日本文学コース	上野 和昭	ウエノ カズアキ	専攻する分野は日本語学、そのなかでも日本語史(とくに音韻史・アクセント史)である。現在は、仏教界に伝わる論議書に記された漢語アクセントについて調べている。これまで、近世の京都アクセントを江戸時代の平曲譜本と現代の京阪式方言から研究するなど、発音注記の付された文献を方言音声と比較しながら研究してきた。言語ならびに言語資料に対しては、つねに「歴史と現在」という二つの立場の融合を心がけ、時間と空間の交差するところに、現代に至る日本語史を構築したいと考えている。
日本語日本文学コース	兼築 信行	カネチク ノブユキ	藤原定家を軸とする中古・中世の和歌文学を専門とする。前近代の和歌表現史や、歌人・歌壇の研究を広く行っており、カバーする時代は近世さらに明治期まで及ぶ。また歌書の文献学的なアプローチ、和歌に関する作法など歌学に属する領域にも研究業績を有する。
日本語日本文学コース	河野 貴美子	コウノ キミコ	和漢比較文学、また特に、書物(漢籍)の伝来とともに、中国の学術・文化が古代日本においていかに受容、摂取されてきたのかを明らかにすべく、研究に取り組んでいる。主たる研究対象は、説話や詩文集、仏典を含む各種注釈書など奈良・平安期の漢字・漢文による著作と、漢魏六朝から隋唐に及ぶ中国古典籍との関係であるが、最近、現代に至るまでの日本における中国学の展開、和文と漢文の歴史的関係、古典籍研究をめぐる日中間の学術交流史などの諸テーマにも関心をもっている。また、朝鮮や渤海なども含め、東アジアの文化・文学・ことばの世界をより広い視点から捉えることをめざし、研究を進めている。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
日本語日本文学コース	陣野 英則	ジンノ ヒデノリ	平安時代の文学(中古文学)、特に物語文学を主たる研究対象としている。これまで、『源氏物語』の言葉、語り手、話声(narrative voice)、〈書く〉こと、読者、受容などの諸問題について調査・検討を重ねてきた。『源氏物語』以外では『うつほ物語』『堤中納言物語』などを考察の対象とすることが多い。さらに、10世紀後半から11世紀半ばあたりまでに生成・享受された文学全般を包括するような視座からの探究をめざしている。一方、中世・近世の『源氏物語』古注釈の展開に関心を抱き、未翻刻の注釈書の紹介などにも取り組んでいる。また、明治期における「国文学」のあり方についての検討も進めつつある。
日本語日本文学コース	高橋 敏夫 (学生募集なし)	タカハシ トシオ	広津柳浪、悲惨小説から、村上春樹、ホラー小説まで、近代・現代文学のほぼ全般を対象に、研究と批評を展開する。とくに小説とメディア、文化、社会、国民国家との関係に関心をもち、方法的にはロシア・フォルマリズムとB・ブレヒトによって提起された「異化」概念を社会化することで、M・バフチンの文化記号論、R・バルトの文化批評、M・フーコーの権力批判等とつなげ、文化研究やポストコロニアリズムも積極的に吸収。近年では、①『大菩薩峠』にはじまる大衆文学のモード研究、②オキナワ文学、アイヌ文学のマイナー文学的考察、③夏目漱石から村上春樹・龍にいたる「戦争・戦場・戦闘」文学の検討、④1970年代以後の現代演劇批評、にとりくむ。
日本語日本文学コース	高松 寿夫	タカマツ ヒサオ	『万葉集』の和歌をおもな研究対象としつつ、7世紀から8世紀にかけての、和歌史の展開に関心をもち、これまで研究を続けてきた。また、上代から平安朝の前期にかけて、どのように和歌史が連続するののかといったことにも、近年、強い関心を抱いている。加えて、同時期の散文についても、特に漢文の創作、その前提としての漢籍受容といったことに関心をもち研究している。上代の韻文・散文いずれの研究を志す場合でも、研究指導を受け入れる用意がある。
日本語日本文学コース	十重田 裕一	トエダ ヒロカズ	現在、1920年代から50年代の近代日本文学と文化を専門に研究しています。研究テーマは、新感覚派を中心とする日本のモダニズム文学の研究、文学と映画の芸術交流の研究、出版メディアと文学の研究、第二次世界大戦後占領期検閲と文学の研究、近代日本文学における本文の研究など。研究対象とする作家は、横光利一、川端康成、堀辰雄、井伏鱒二、谷崎潤一郎、坂口安吾など。今後五年のあいだに推進予定の研究テーマは、「新感覚派文学の歴史的研究」「総合雑誌における占領期検閲と文学との相互関連性の研究」「出発期「文藝春秋」にみる1920～30年代のマスメディアと文学の展開」などです。
日本語日本文学コース	鳥羽 耕史	トバ コウジ	日本近代文学専攻。20世紀後半の日本文学について、文化運動や社会運動との関係や、映画、美術、演劇、テレビなど、他ジャンルとの交流に注目しながら研究している。1950年代のサークル運動、戦後の記録映画、幻灯、学生運動、近代の座談会、文壇について、国内外の文学、歴史学、社会学、思想史、映画学、教育学などの専門家との共同研究も数多く行っている。これまでに安部公房、杉浦明平、関高健、石川淳、富士正晴、小松左京、筒井康隆、貴司山治や、ダムや東京タワーの建設と記録映画、映画『蟹工船』、雑誌『人民文学』、『総合文化』、中国の影響を受けた連環画などについて研究してきた。現在は安部公房の評伝に取り組みながら、サークル運動を中心とする戦後文化運動をグローバルな文脈に位置づける試みを続けている。
日本語日本文学コース	松本 直樹 (学生募集なし)	マツモト ナオキ	上代散文専攻で、主に『古事記』『日本書紀』『出雲国風土記』の「神話」を研究している。各々は、民間で口承されていた純粋な神話の型を利用しながら、特定の主題のもとに編まれた「神話」である。神話の力と、新しい「神話」作りの営み。古代神話の世界を立体的に捉えてゆきたい。
日本語日本文学コース	宗像 和重	ムナカタ カズシゲ	日本近代文学および近代の書物と出版に関する研究。坪内逍遙・森鷗外・尾崎紅葉らの文学テクストを中心として、明治から大正にかけての近代文学成立・形成期の諸相に目を向け、その展開を多角的に跡づけることを目標としている。また、近代文学が「活字的世界」(前田愛)の所産であることから、原稿をはじめとする肉筆資料類や、印刷・出版・書物など、近代文学に関わる活字媒体の考察を通して、文学作品の生成と流通、そして受容の過程をより具体的に検証したいと思っている。
日本語日本文学コース	森山 卓郎	モリヤマ タクロウ	現代日本語文法の記述的研究をしています。特に、文末表現を中心に、言葉の中の論理と認知の関わりについて考えてきています。近年、関心は、文法研究を軸にしつつも、それだけではなく、語用論的観点も含めたコミュニケーション論、文学的表現の文法的分析、外国語と日本語の対照研究、音声と文法との関わり、などにも広がっています。同時に、言葉に着目した国語教育、日本語教育など、応用的研究も大切だと思っています。
日本語日本文学コース	和田 琢磨	ワダ タクマ	『太平記』を中心とした南北朝時代から室町時代(14世紀～17世紀)の軍記物語・散文作品を研究している。具体的には、『太平記』の生成と表現世界、南北朝・室町時代における『太平記』の受容、軍記物語を踏まえた合戦絵巻や室町時代物語、『明德記』や『応永記』といった室町軍記、の研究を行っている。近年は『義経記』にも関心があり、新出伝本の紹介や位置づけを行っている。したがって、大学院では軍記物語・南北朝時代の散文作品・『義経記』を中心に指導を行う。
英文学コース	小田島 恒志	オダシマ コウシ	D. H. Lawrenceを中心にモダニズムから今日にいたる現代イギリス小説を研究している。現代(特に今日の)英米演劇、およびその翻訳論にも深い関心がある。
英文学コース	チャン エドワード ケイ	チャン エドワード ケイ	Originally from California, I am the son of Japanese and Chinese-Mauritian immigrants and have lived in the states of New York, Indiana, and Georgia, as well as in Saudi Arabia, before coming to Japan in 2011—all of which have permanently warped my sense of time, place, and culture. I have taught at several universities in the U.S. and Japan, and my research and teaching interests include issues of race in 20th/21st-century U.S. American literary, film, and popular culture, and transnational perspectives on U.S. American culture. Representative publications include “Inhabiting the Space of the Other: Josef von Sternberg’s Anatahan” (2017, Wayne State University Press), The Racial Horizon of Utopia: Unthinking the Future of Race in Late-Twentieth-Century American Utopian Novels (2016, Peter Lang), “Narrating Social Space: Ceremony, Utopian Desire, and Cultural Difference” (2012, Civilization 21), and “(Vulgar) Identity Politics in Outer Space: Delany’s Triton and the Heterotopian Narrative” (2001, J. of Narrative Theory). My seminar addresses literature, critical theory, and issues of race in relation to students’ particular interests.
英文学コース	都甲 幸治	トコウ コウジ	専門は現代アメリカ文学・文化。主に1970年代以降を扱っている。研究している作家はDon DeLilloであるが、Raymond Carver, Richard Brautigan, Margaret Atwoodなどにも興味がある。著書に『21世紀の世界文学30冊を読む』(新潮社)、『偽アメリカ文学の誕生』(水声社)、訳書にCharles Bukowski『勝手に生きる!』(河出文庫)、Don DeLillo『天使エスメラルダ』(新潮社,共訳)、Junot Díaz『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』(新潮社,共訳)などがある。
英文学コース	栩木 伸明	トチギ ノブアキ	アイルランド文学・文化を研究している。主な研究対象はW. B. Yeatsおよびそれ以後の現代詩(Seamus Heaney, Michael Longley, Derek Mahon, Ciaran Carson, Paula Meehanなど)。James Joyce以降の現代小説(とくにWilliam Trevor, Colm Tóibín, Colum McCannなど)にも興味があり、翻訳・紹介をしている。また、現代文化の中に生き続けている口承文化や伝統音楽にも深い関心がある。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
英文学コース	冬木 ひろみ	フユキ ヒロミ	16, 17世紀のイギリス演劇, 特にWilliam Shakespeareを中心とするエリザベス朝演劇を研究している。時代と舞台への考察を常に行いながら深く劇作品のテキストを読み, 世界でも例を見ない演劇の黄金期を, 今現在を生きる者の視点と感性で深く掘り下げてゆくことをモットーとしている。演劇博物館COEでの成果も生かして, 新たなシェイクスピア批評を開拓するとともに, 大学院生の論文・発表の支援を精一杯してゆきたい。
英文学コース	ホサイン タニア	ホサイン タニア	My research interests include language rights, language policy, bilingualism and bilingual education and critical multicultural approaches to education. I have published several books and over 25 articles and chapters in these areas. My seminar examines English language issues at societal and global levels. It discusses the historical context of the global development of English, status of English as a first and second language, and issues involving English that are currently developing in and across diverse societies. My seminar will help students to understand the educational systems, successes, and problems of different countries. It also shows how education creates inequalities in society. One global issue is the policy prescription that guides the delivery of education in school systems in developing nations.
英文学コース	堀内 正規	ホリウチ マサキ	専門領域は, いわゆる<アメリカン・ルネッサンス>と呼ばれることもある, 19世紀中葉のアメリカ文学。過去の研究歴から言えば, 中心となるのはHerman Melville とRalph Waldo Emersonで, 同時代に全く対照的とも言える世界観を提示したこの二人の書き手, その両極を往き来する点に, 研究者としての私の特徴がある。Nathaniel Hawthorne や, Emily Dickinson についても論文を書いている。この時代の文学に限らず, 20世紀のアメリカ文学や文化にも強い関心がある。
英文学コース	ライアン スティーブン	ライアン スティーブン	My research comes within the fields of second language acquisition and second/foreign language education. In particular, I am interested in the psychology of foreign language learning. This is a growing field of study, which investigates questions of why some individuals learn languages at a different pace and to a different level to others. Research in this area looks at a range of individual characteristics, such as personality, aptitude, beliefs and considers how these can shape approaches to learning a foreign language. It is a highly practical field, attracting considerable attention and interest from experienced teachers who are looking to develop a better understanding of their own classrooms and teaching. Other current research projects include an investigation of the role of the arts in language education, a study of lifelong language learners, and research into the applications of Content Language Integrated Learning (CLIL) and English as Medium of Instruction (EMI) within the Japanese educational context.
英文学コース	渡辺 愛子	ワタナベ アイコ	専門は「現代イギリス地域研究」で, ディンブリン横断的なアプローチをめざしている。最近の大学院担当科目では, 近年注目を集めているミドルブラウ研究を扱っている。個人的な関心は, 戦間期に刊行された新聞上の連載小説の社会的役割について。また, 文学や作家を現代史や思想史というコンテキストにおいて再考したり, 文学(作品)と文化理論との関連を考察している。
仏語仏文コース	川瀬 武夫	カワセ タケオ	主たる専門研究分野は, ロマン派(ラマルティース, ユゴー, デボルド=ヴァルモール)の台頭から, ボードレールによる近代性modernite の確立を得て, 高踏派(ルコント・ド・リール, バンヴィル)や象徴派(ヴェルレーヌ, ランボー, マラルメ)へとつながる19世紀フランス詩。さらに, アポリネールにはじまり, シュルレアリスムを経由して, ポンジュやボヌフォワに至る20世紀フランス詩の系譜もカヴァーする。一方で, 日本とフランスの近代詩の比較研究や, 17世紀から20世紀にかけてのフランスにおける文学と隣接する諸ジャンル(絵画, 音楽, 舞台芸術)との比較研究にも深い関心を有している。
仏語仏文コース	鈴木 雅雄	スズキ マサオ	20世紀フランス文学。特にダダやシュルレアリスムなど、いわゆる「前衛」的文学芸術運動に関する研究。また20世紀の文学・芸術と、同時代の哲学思想や人文科学(人類学、精神分析、など)との関係という問題の全般に関心を持っている。
仏語仏文コース	瀬戸 直彦	セト ナオヒコ	中世フランス文学(オック語・オイル語), 文献学, テクスト校訂。 中世の南仏抒情詩(トルバドゥール)の作品研究を中心に、テクストの正確な読解、そのための写本校合にとくに関心をもっている。12-13世紀の詩人たちが、いかに精緻な詩を創作したか、それを現代のわれわれがいかに読むかという問題を、さまざまな参考文献を悉皆調査のうえ、きわめていきたいと考えている。
仏語仏文コース	デュストド オディール	デュストド オディール	Litterature francaise fin XVI ‘～XVIII’ siecle.Reception de la mythologie greco-latine en France XVI ‘～XVIII’ siecle.
仏語仏文コース	芳川 泰久 (学生募集無し)	ヨシカワ ヤスヒサ	19世紀から20世紀におよぶフランス小説, 20世紀後半以降の批評について研究指導します。とりわけ近代以降の認識論的な布置の変化がどのように小説的言説にかかわっているか, といった問題に焦点をあてる。
独語独文コース	クラヴィッター アルネ	クラヴィッター アルネ	ドイツ近現代文学、比較文学、文学理論、解釈学
独語独文コース	藤井 明彦 (学生募集無し)	フジイ アキヒコ	「専門分野」は社会言語学的観点からの「初期新高ドイツ語」(14～17世紀のドイツ語)の研究。具体的には, 15 世紀に登場した活版印刷メディアと当時の言語変化との関連を探るために, ドイツ語の揺籃期本に関しては最も生産的であった南ドイツの都市アウクスブルクの印刷言語を研究している。「関心分野」は言語学をモデルにした一般記号学の領域。特に音楽と建築を対象にした記号美学の構築に関心がある。
独語独文コース	松永 美穂	マツナガ ミホ	ドイツ現代文学(第2次世界大戦後のドイツ語圏における文学) ジェンダー論(文学・マンガにおけるジェンダーイメージ) 翻訳論と、文学におけるエクソフォニー体験
独語独文コース	村井 翔	ムライ ショウ	フロイトの研究者で、アプローチの仕方としては1980年頃にはやった脱構築批評という古風な(しかし今でもインパクトを失っていないと信じる)方法をとっています。すなわち、フロイトの精神分析理論を彼自身のテクストに適用することによって、彼の死角になっている無意識の部分をあぶり出すというやり方です。文学理論としての脱構築批評(ド・マン)、ディスクール分析(キットラー)やフロイトの時代である世紀転換期ウィーン文化の諸相(クリムト、マラー、ホフマンスタール、ムージル、ヴィトゲンシュタインなど)も私の守備範囲です。
独語独文コース	室井 禎之	ムロイ ヨシユキ	専門分野はドイツ語学および言語学です。そのなかでも特に語彙の意味の問題を中心に研究しています。基本的に認知意味論の立場をとっていますが、意味をコミュニケーション行為のなかで発生し、定着するものと考えますので、関連性理論などの語用論も当然視野に入れています。分析対象にしている言語は主としてドイツ語と日本語です。現在はドイツ語と日本語の形容詞の意味の対照研究を行っています。その際、コロケーション分析も重要な分析手段として用いています。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
独語独文コース	山本 浩司	ヤマモト ヒロシ	ドイツ語圏の現代文学・現代文化を専門とするが、なかでも大きな関心は以下の諸分野に向けられている。1) オーストリア現代文学(バットハマン、アイヒンガー、ハントケ、ベルンハルト、イエリネク、ヴィンクラーら)。2) 戦後の詩論的抒情詩(バットハマン、ツェラン、アイヒ、ポプロウスキー、フーヘル、トーマス・クリングら)。3) ヘルタ・ミュラーら東欧系作家によるドイツ語文学。4) 1989年以降のドイツ文学(特に旧東独の作家、カーチャ・ランゲ＝ミュラー、ヴォルフガング・ヒルビヒ)。5) 現代小説にみる性愛と暴力の表現(マゾヒズム小説、テロ小説)。7) 現代文学における間メディア性(トーマス・クリング、シュタインエッカー)6) ニュー・ジャーマン・シネマ(ファスビンダー、ヴェンダースら)。
露語露文コース	貝澤 哉	カイザワ ハジメ	19世紀末から20世紀初期のロシア文学・文化史、文学生産の場の社会史的研究。ロシア・フォルマリズム以後の文芸学、文学理論、文化理論(バフチンを中心とする)。20世紀初期のロシア思想(フロレンスキイ、カルサーヴィンなど)。
露語露文コース	坂庭 淳史	サカニワ アツシ	19世紀ロシア文学・思想研究:主にフョードル・チュッチェフ、哲学サークル愛智会、チャアダーエフ、スラヴ派など、1820-60年代の詩と思想について、当時の社会情勢やロシアと西欧の関係、出版状況と合わせて研究しています。またそれらの研究成果を踏まえ、プーシキンやドストエフスキーといった19世紀ロシアの作家たち、さらに20世紀のタルコフスキー父子の創作についても考察を進めています。
露語露文コース	三浦 清美	ミウラ キヨハル	前近代ロシアの文化研究が専門分野である。近現代のロシア文化を形作り、支えているのは、988年のキリスト教受容とそれにさかのぼる時代から脈々と形成されてきたロシアの基層文化、民衆文化である。本教員は、ピョートル大帝の西欧化改革までの中近世ロシア史的的確な把握にもとづき、前近代の書き言葉の文学、さらに、それと並行して存在し18世紀末頃からロシアの知識人に採集された民衆の口承文芸、中世ロシア人の生活習俗とその宗教的背景、近現代へのその継承の問題を研究し、また、当該分野の研究指導を行っている。
露語露文コース	源 貴志	ミナモト タカシ	専門分野は第一に、19世紀ロシア文学ですが、指導範囲としては、18世紀末の文学状況や20世紀のロシア革命前後までの主として散文文学を含みます。第二は、二葉亭四迷を中心とした、日露比較文化です。主として明治以降の日本文学へのロシア文学の紹介とその影響をテーマとしますが、江戸時代の漂流民記録にはじまり、広く日本とロシアの文化的な交流史を扱います。第三は、ロシア近代の出版文化です。広い意味での書籍文化研究から狭義の書誌学(目録学)と文学研究の関連を扱います。
露語露文コース	八木 君人	ヤギ ナオト	ロシア散文史、ロシア・フォルマリズム、ロシア・アヴァンギャルド
中国語中国文学コース	岡崎 由美	オカザキ ユミ	中国近世の小説、戯曲。近現代の武侠小説。「通俗」或いは「同工異曲」といった評価のもとに扱われがちな大衆文芸の独自の表現力や世界観を探究している。また、日本における中国古典戯曲の受容についても研究を進めている。
中国語中国文学コース	千野 拓政	センノ タクマサ	文化システムの転換という視角から中国語圏の近現代文学・文化を研究している。近年は次のようなテーマに取り組んでいる。1.近代文学の誕生:近代に生じた文学の根源的な変化。2.アジアの若者文化:サブカルチャーや村上春樹の流行など、東アジアの諸都市に共通する文化現象とその背景にある精神状況の変化。3.総力戦体制と文化的動員:大衆動員の一環という視点からの現代文化の再検討。4.同時代文学・映画・サブカルチャー批評。
中国語中国文学コース	内藤 正子	ナイトウ マサコ	中国語の語彙・文法論、表現・文体論を中心に、日本語や英語等との比較対照研究、及びこうした研究の基礎となる種々の言語理論について考察している。特に、字本位理論(sinogram-based theory)は中国語の構造や特徴を解明する為の最適な枠組みであると同時に、既存の意味論や語用論にとらわれない新しい意味研究やコミュニケーション研究に大いに活用できると考え、関心を持っている。
中国語中国文学コース	楊 達	ヨウ タツシ	コンピュータを使った中国語教育の理論と実践。また、その学問的背景として、認知言語学の観点からの中国語研究。視知覚と量詞との相関、「情報のなわ張り」理論に基づく副詞や語気助詞の研究。
演劇映像学コース	児玉 竜一	コダマ リュウイチ	日本の古典演劇、とりわけ歌舞伎・人形浄瑠璃を主たる研究対象とする。近世期から、近現代の伝承にまで範囲は及ぶため、近代の芸能史全般、演劇評論史に及ぶ周辺領域をカバーする。
演劇映像学コース	小松 弘	コマツ ヒロシ	映画史学。専門は無声映画。特に欧州諸国、アメリカそして日本の無声映画史を扱う。
演劇映像学コース	鈴木 晶	スズキ ショウ	研究指導の範囲は、クラシック・バレエからヒップホップにいたるまで舞踊学全般。本人が専門的に研究してきたのは、欧米の劇場舞踊史、とくにバレエの歴史的研究であり、さらに狭く絞るならば、19世紀フランスのロマンティック・バレエと、20世紀初頭のバレエ・リュス、そして現代バレエである。加えて近年は、ハリウッドのミュージカル映画を集散的に研究すると同時に、バレエの姉妹ともいうべきシンクロナイズドスイミング、フィギュアスケート、新体操の文化史的研究もしている。
演劇映像学コース	武田 潔 (学生募集なし)	タケダ キヨシ	専門分野は映画理論。主な研究テーマは映画における自己反省作用とフランス映画言説史。博士論文『映画における自己反省作用に関する言説のアルケオロジー』(フランス国立社会科学高等研究院, 1986年)。著書『明るい鏡―ルネ・クレールの逆説』(早稲田大学出版部, 2006年)ほか。
演劇映像学コース	藤井 仁子	フジイ ジンシ	映画史、映画理論。1930年代の日本映画、とりわけ成瀬巳喜男監督作品の研究から出発し、同時期の文化映画についても言説分析の手法を用いて研究した。映画評論家として活動するようになるにつれて現代映画に関する発言の機会が増え、現在では日本映画とアメリカ映画、ならびにドキュメンタリー映画全般を主な研究対象としている。英語圏の豊かな研究蓄積を踏まえつつ、一貫した関心は、フィクションと歴史が結びうる複雑な関係をフィルム・テキストの表層において解明することにある。
演劇映像学コース	藤井 慎太郎	フジイ シンタロウ	演劇学、芸術文化環境学。フランス語圏(フランス、ベルギー、カナダ)、英語圏、日本を中心に現代舞台芸術の美学と制度を研究している。主な著作に『ポストドラマ時代の創造力―新しい演劇のための12のレッスン』(監修、白水社、2014年)、『芸術と環境―劇場制度・国際交流・文化政策』(共編著、論創社、2012年)、Théâtre/Public, no.198, “Scènes françaises, scènes japonaises : allers-retours”(共同責任編集、2010年)など。
演劇映像学コース	和田 修	ワダ オサム	日本近世芸能史
美術史学コース	川瀬 由照	カワセ ヨシテル	日本および東洋の彫刻史を主な専門とする。仏像・神像・肖像・仮面・動物彫刻など対象や時代を広く扱い、実作例の調査と文献史料の正確な分析を行い、実証的な彫刻史研究を旨とする。授業は美術史の基礎的な事柄の習得を確実に身につけるように実施する。あわせて関連する東洋美術史や日本美術史、文化財学、資料保存、博物館学に関する知識や技術の習得に配慮していく。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
美術史学コース	児嶋 由枝	コジマ ヨシエ	西洋美術史(ルネサンス・バロックを中心に、近世から近現代美術まで)
美術史学コース	坂上 桂子	サカガミ ケイコ	美術史。都市美術論。近現代アートを中心とし、とりわけ、時代と地域を超えた「超域的」文化交流、およびその展開の場としての「都市における美術」に関する諸問題(表象、パブリックアート、美術館など)が対象。
美術史学コース	成澤 勝嗣	ナルサワ カツシ	日本近世絵画史研究
美術史学コース	肥田 路美	ヒダ ロミ	東洋美術史、仏教美術史。主に中国南北朝時代から唐・宋時代の彫塑像や絵画、石窟摩崖遺跡等を材料に、東アジアの仏教美術の成立事情や歴史的展開について研究している。世俗美術、墓葬美術との関係にも注視したい。また、大学院の演習や自主ゼミでは、初唐の道宣撰述『集神州三宝感通録』について美術史の観点に立った詳細な注釈を継続的におこなっている。
美術史学コース	益田 朋幸	マスダ トモユキ	ビザンティン美術史、キリスト教図像学。講義では専門のビザンティン美術、キリスト教図像学に関する話をするが、演習では学生各自の関心に応じた研究発表を広く行ってもらうことになる。「時間の表現」、「イメージとテキスト」、「アイコンとナラティブ」といった共通テーマを設定して発表してもらう場合もある。最近の私自身の研究は二つの系統に要約される。1)後期ビザンティン聖堂装飾プログラム、2)レクショナリー(典礼用福音書抄本)写本の挿絵と聖者暦
美術史学コース	山本 聡美	ヤマモト サトミ	日本美術史(古代・中世絵画史、絵巻、仏教絵画)
日本史学コース	伊川 健二	イガワ ケンジ	日本中近世史のうち対外交流史。大学院の課程では近世史の担当として、これまで琉球国由来記や近世の飲酒文化に関わる諸史料を演習で検討している。自らの研究課題としては、天正遣欧使節や明恵・慶政の対外観、さらには17世紀のラテンアメリカへの日本人移民などに関心をもっている。
日本史学コース	大日方 純夫 (学生募集なし)	オビナタ スミオ	日本近代史。もともとの専門は、内務行政史とくに警察史の研究と、自由民権期の政治史とくに政党史の研究であるが、近年は、対外関係史・都市史への関心を強めている。政治史的な接近を基本とするが、それにとどまらず、社会史・文化史などを含め、広く近代日本の全体像を把握することを目指している。
日本史学コース	川尻 秋生	カワジリ アキオ	日本古代史専攻。とくに平安時代を専門とする。海上交通・平将門の乱を中心とした東国史、寺院を中心とした仏教史、格式を中心とする法制史、日本と中国の法制度の比較などをおもな研究対象にしている。また、現在は、古代史と中世史、歴史学と考古学・文学との協業の必要性を感じ、これらを総合しつつ、幅広い視野を持った研究を志向している。 現在の演習では、『類聚三代格』をテキストに用い、史料を厳密に読んでいる。その上で、法制史料としての解釈、実態を示す史料としての解釈を行い、これまでにない意味内容を見出すことを、受講生一同とともに目指している。
日本史学コース	久保 健一郎	クボ ケンイチロウ	日本中世史を専攻。特に中世後期および中近世移行期の権力構造論や戦争に関わる種々の事柄について追究している。
日本史学コース	下村 周太郎	シモムラ シュウタロウ	日本中世史、特に中世国家論、鎌倉幕府論、政治史、戦争史、環境史
日本史学コース	田中 史生	タナカ フミオ	専門は日本古代史。渡来人・渡来文化、入唐僧、国際交易、列島北方史・南方史などの研究を通し、列島古代社会の歴史的多元性・多様性・国際性の解明をすすめている。
日本史学コース	谷口 眞子	タニグチ シンコ	日本近世史(江戸時代の政治文化・法・思想史)が主な専攻分野である。江戸時代は軍人たる武士が政権を握り、軍隊が常駐していたにもかかわらず、二百数十年間、戦争がない時代であった。それが日本近世の政治・社会・文化や法・裁判、武士の心性などにどのような影響を及ぼしたのか、研究をしている。これまで、軍事的観点からみた18～19世紀の名誉・忠誠・愛国心の比較研究、江戸時代の武士道論と兵学、殉死、赤穂事件と「忠臣蔵」文化の形成・受容、朝廷・幕府・諸藩によって行われる恩赦について考察してきた。現在は、18世紀～20世紀の「葉隠」受容史、「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」などの研究に着手している。日本史、西洋史、東洋史、思想史、法制史をまたぐ領域横断的な研究に関心がある。
日本史学コース	鶴見 太郎	ツルミ タロウ	日本近現代史を専攻。特に大正・昭和戦前期の文化史・思想史を主領域にしている。この時期、日本の郷土研究は飛躍的にその基盤を整えるが、そこで構築された思想世界は、戦時下に於いて経験的、物証的な研究が可能な希有の環境となった。その要因について柳田国男と彼を中心に形成された民俗学を検証することで、その実像に迫る。
日本史学コース	真辺 将之	マナベ マサユキ	日本近現代史専攻。特に明治期の思想と政治を専門とする。思想史と政治史とはともすれば別個の枠組みのなかで没交渉的に行われがちだが、細かな政局史的叙述に陥りがちな政治史研究を思想史や文化史と結び付けることによってより広い視野から政治をとらえかえすとともに、思想を細かな政治状況のなかに位置づけることによってその生成・展開のダイナミズムを明らかにし、思想史と政治史との橋渡しを行うことを意識して研究をすすめている。現在、具体的には、明治期の「欧化」と「反欧化」、近現代日本の政党認識、明治から戦後に至る早稲田大学史、ならびに大隈重信研究といったテーマに取り組んでいる。
東洋史学コース	飯山 知保	イイヤマ トモヤス	10～16世紀の中国を中心とした東アジア史
東洋史学コース	石見 清裕 (学生募集なし)	イワミ キヨヒロ	中国の魏晉南北朝～隋唐時代の政治史、国際関係史。具体的には、当該時代の宮廷政治や儀礼、律令制、墓誌に見る墓葬のほか、外交関係や民族の接触・融合のあり方、ひいては日本の遣唐使まで、幅広い分野を専門とする。したがって、扱う史料も編纂歴史書ばかりでなく、法律書、儀式書、古文書、石刻など多岐にわたる。中国の歴史は、狭義の中華世界でのみ解釈するのではなく、広い視野でユーラシア史に位置づけて考えねば、正確な歴史の展開像はつかめない。常にその点を心がけて研究している。近年のテーマは、中国におけるソグド人集落のあり方や、唐宋変革における沙陀族の意義など。
東洋史学コース	柳澤 明	ヤナギサワ アキラ	清朝史を中心とする16～19世紀の東アジア史。最近は特に次のようなテーマに関心を持っている。1)清帝国の基幹システムの一つである八旗制の歴史的展開。八旗の種々のタイプと、それに属した人々の社会・文化変容。2)清朝をめぐる国際関係。特に清－ロシア間の外交交渉と、両国間に位置するモンゴルや東北(満洲)の諸民族の動向。また、こうした内陸部における国際関係・民族関係を、いわゆる朝貢システムとどのように関連づけるかという問題。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
東洋史学コース	李 成市	リ ソンシ	紀元前2, 3世紀から紀元後10世紀に至る時期に、中国東北地方から朝鮮半島にわたる地域で形成された諸国家(古朝鮮, 高句麗, 新羅, 百済, 加耶, 渤海)の歴史・文化研究および、それらの諸国家と同時代の中国王朝や、古代日本との関係史を中心にした東アジア史研究に従事している。現在取り組んでいる課題は、高句麗・新羅の石碑や、新羅・百済の木簡など出土文字資料を通して、中国文明との接触、葛藤を経ながら、この地域に形成された地域文化の特質の解明をめざしている。その他に、日本統治下の植民地期を中心とする朝鮮古代史研究の史学史や、日本・韓国・中国における古代史研究を中心とする歴史認識問題に取り組んでいる。
西洋史学コース	井上 文則	イノウエ フミノリ	専門研究分野は、ローマ帝国史。特に3世紀の軍人皇帝時代のローマ帝国政治史を専門としている。また当時流行したミトラス教についても関心をもっている。
西洋史学コース	小原 淳	オバラ ジュン	19～20世紀のドイツ史。政治史、社会史を専門とするが、同時期の経済史や文化史、さらに近世史にも関心がある。
西洋史学コース	甚野 尚志	ジンノ タカシ	中世ヨーロッパ史を専門としている。教会史、文化史、社会史に主たる関心をもちながら研究を行ってきた。研究の柱のひとつは、中世の思想と文化をめぐる諸問題で、これまでカロリング期から12世紀ルネサンス期の聖職者知識人の社会認識・教会論・歴史意識などを分析してきた。またもうひとつの柱は、中世の教会と社会をめぐる諸問題で、正統と異端、教皇の儀礼と権威、公会議と教皇権、地域の司教座と都市との関係(とくにコンスタンツ)をめぐる問題を論じてきた。
西洋史学コース	中澤 達哉	ナカザワ タツヤ	スロヴァキア史、東欧近現代史、ハプスブルク帝国史、ナショナリズム・スタディーズ
西洋史学コース	松園 伸	マツゾノ シン	研究対象はイギリス近現代史一般。とくに18～19世紀ブリテンの政治・社会、スコットランド史に関心を持っている。
西洋史学コース	森原 隆	モリハラ タカシ	近世・近代フランス史を専門とする。社会史および社会文化史的観点からアンシャン・レژیーム期、革命期の政治・社会・文化の諸問題、とりわけ出版文化、ジャーナリズム、知識人等について考察している。
考古学コース	近藤 二郎 (学生募集なし)	コンドウ ジロウ	専門研究分野は、エジプト学およびエジプト考古学である。特に古代エジプト新王国時代における葬送の問題に関心を持つ。ナイル川の上流、上エジプトの中心地であるテーベ西岸のネクロポリス・テーベにおける墓域の形成と変遷を主として扱っている。テーベ西岸地域においては、第11王朝が北のヘラクレオポリスを拠点とする第10王朝と覇権を競う時期から、墓域が形成されるようになる。その後、第2中間期から新王国時代になるとエジプトを代表する墓域へと発展していく。岩窟墓の形態の変遷、再利用のあり方、王墓の形態と選地、墓作りの組織等をヒエログリフによる文字資料、考古学資料等を多角的に駆使することによって解明することを目指す。
考古学コース	城倉 正祥	ジョウクラ マサヨシ	東アジア考古学(古墳・寺院・都城)を専門とする。特に、中国における都城制の発展と東アジア・シルクロードへの展開過程に関して、発掘遺構の分析や衛星画像のGIS分析などの方法を用いて研究を進めている。また、日本国内においては、関東地方をフィールドとして古墳・寺院などのデジタル三次元測量・GPRなどの非破壊調査を進めている。東アジアにおける古代日本の歴史的位置を、古墳・寺院・都城の設計原理を通じて考究する点が研究の目標である。
考古学コース	高橋 龍三郎	タカハシ リュウザブロウ	日本先史時代の社会と文化を専門に研究する。主に縄文時代を扱うが、旧石器時代、弥生時代も対象とする。特に社会的側面に光を当てる。今日の複雑で階級化した社会への先駆をなし、その基盤をなす脱平等化・階層化過程の社会は、縄文時代に胚胎し、弥生・古墳時代の階層化社会を経て、やがて古代国家にいたる。その過程の解明は、先史学研究の核心をなすもので、発達した現代の考古学で注目されている。それには発掘調査のデータだけでは、確かな推測は不可能で、未開社会等のデータを背景に社会人類学的に構築された理論的研究を参照する必要がある。理論的研究を目指しているが、前提となる土器型式編年学や集落、墓制なども研究している。
考古学コース	田畑 幸嗣	タバタ ユキツグ	東南アジアの考古学、地域研究、世界遺産研究。主要なフィールドはカンボジア。主な関心は東南アジア産陶磁器の生産と流通、東南アジアにおける貿易陶磁器研究、モニュメンタリティーに欠ける文化遺産の保存と修復活動。最近は、陶磁貿易が在地陶器生産に与えた影響について主に研究を進めており、消費地遺跡と生産遺跡の発掘調査を行っている。
考古学コース	寺崎 秀一郎	テラサキ シュウイチロウ	中南米地域の考古学研究。現在はマヤ地域、ホンジュラス共和国コパン県での野外調査を継続中。主要なテーマは、マヤ古典期(AD 250～900年頃)における地方センター(二次センター)の形成過程について、コア・エリアとその周縁部との政治的経済的関係を検証し、コア・エリア中心史観(王朝史研究)とは異なる視点からの「複雑な社会」の解明。また、ラテンアメリカ地域特有の先住民文化遺産／資源をめぐる現代社会との関わりについても取り上げ、先住民文化の過去と現在を考える。地域研究としての性質上、英語、スペイン語の読解能力を要する。
考古学コース	長崎 潤一	ナガサキ ジュンイチ	専門分野は北方考古学、旧石器考古学。北海道を主なフィールドとしている。現在の主要なテーマは更新世における日本列島への人類の移住、拡散、適応についてであり、北海道の細石刃石器群を保有する人類集団の遊動領域論、後期旧石器時代前半期の局部磨製石斧を保有する石器群の社会生態学的位置付けも研究対象としている。
文化人類学コース	國弘 暁子	クニヒロ アキコ	文化人類学を専門として、特にジェンダー、宗教に関わるテーマに関心を持つ。インド、グジャラート州において、ジェンダーの境界線を超えて女神に帰依する人々(一般にはヒジューとして知られる)と共にフィールドワークを実施した経験を持ち、ジェンダー規範に基づく親族関係のあり方や宗教空間での贈与の意義についての考察を行う。
文化人類学コース	鶴見 太郎 (学生募集なし)	ツルミ タロウ	日本近現代史を専攻。特に大正・昭和戦前期の文化史・思想史を主領域にしている。この時期、日本の郷土研究は飛躍的にその基盤を整えるが、そこで構築された思想世界は、戦時下に於いて経験的、物証的な研究が可能な希有の環境となった。その要因について柳田国男と彼を中心に形成された民俗学を検証することで、その実像に迫る。
文化人類学コース	松前 もゆる	マツマエ モユル	ジェンダー、国際労働移動、エスニシティ、パルカン地域研究
表象・メディア論コース	石岡 良治	イシオカ ヨシハル	表象文化論、視覚文化論、ポピュラー文化研究、イメージ研究
表象・メディア論コース	岡室 美奈子	オカムロ ミナコ	現代演劇論、テレビドラマ論、オカルト芸術論(モダニズム期中心)、アイルランド文学・演劇・文化論。特にサミュエル・ベケットの演劇・テレビドラマ・映画の研究を専門とし、メディア論的視点やオカルト的視点からも幅広く考察している。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
表象・メディア論コース	坂内 太	サカウチ フトシ	身体表象論、演劇論、パフォーマンス・スタディーズ、アイルランド現代演劇・モダニズム文学研究。「身体」及び「身体の表象」を主たる問題としながら舞台芸術、文学、写真、映画などの多領域を横断しながら考察を行う。
表象・メディア論コース	チェン ドミニク	チェン ドミニク	デジタル・メディア論、メディア・アート論
表象・メディア論コース	橋本 一径	ハシモト カズミチ	表象文化論、西洋思想史、イメージ文化史、身体イメージ論。これまでは自己や他者のアイデンティティの基盤となるイメージの変遷を、「指紋」などを対象として、思想史的に跡づける研究をしてきました。フランスの美術史家・哲学者ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンらの思想を手がかりに、人類にとってイメージとは何かという問題について、領域横断的に考察することを目指しています。
表象・メディア論コース	長谷 正人	ハセ マサト	文化社会学、映像文化論、メディア文化論。人間の文化芸術活動と社会との関係を問題にする。とりわけ写真、映画、テレビなどの映像文化を中心としたメディアテクノロジーが、19世紀以来の大衆の普及のなかで近代社会にどのような影響を与え、人々の意識をどのように変えて来たかを考古学的な視線をもって探求し、それによって現状のメディア文化を批判するような視線を獲得することを目指す。
表象・メディア論コース	藤本 一勇	フジモト カズイサ	専門は現代思想、情報メディア論、技術生態学、「ポスト・モダン」論。情報技術や生テクノロジーの発達のなかで、個や社会や世界の在り方がどのように変貌しようとしているかを、哲学・政治・経済・技術・文化の総合的な観点から研究する。特にフーコー、ドゥルーズ、デリダ、アガンベン、シモンドン、ランシエール、バディウを中心とした現代思想の成果を、様々な理系の領域と接続し、生工学時代における新たな思考・価値・政治・倫理の可能性を探っている。
表象・メディア論コース	細馬 宏通	ホソマ ヒロミチ	視聴覚文化における表象文化研究、発話と身体動作によるコミュニケーションの研究
表象・メディア論コース	宮沢 章夫	ミヤザワ アキオ	演劇、文学
中東・イスラーム研究コース	五十嵐 大介	イガラシ ダイスケ	前近代のアラブ・イスラーム史、特にマムルーク朝時代(1250-1517年)のエジプト・シリアの制度史・社会経済史・政治史を専門としています。現在はイスラーム寄進制度(ワクフ)の研究に取り組んでいます。農村や都市の不動産を特定の宗教・慈善施設／活動に寄進するワクフ制度は、前近代のイスラーム世界各地で都市の発展や商業・学問・文化の振興に寄与し、経済・社会活動を支える重要なシステムとして機能していました。寄進文書を読み解きながら、当該社会においてワクフが果たしていた多面的な役割について明らかにしたいと考えています。
中東・イスラーム研究コース	大稔 哲也	オオトシ テツヤ	中東社会史、エジプト史、ムスリム社会研究、中東民俗学
中東・イスラーム研究コース	小松 香織	コマツ カオリ	オスマン帝国史、近代トルコ史
中東・イスラーム研究コース	佐藤 尚平	サトウ ショウヘイ	湾岸政治史、中東地域研究、イギリス帝国史
国際日本学コース	エメリック マイケル	エメリック マイケル	Michael Emmerich's research interests span a wide range from Genji monogatari to early modern, modern, and contemporary Japanese prose fiction. He has a particular interest in translation, both as a practice and as a phenomenon, and in histories of Japanese literature in other languages.
国際日本学コース	河野 貴美子	コウノ キミコ	和漢比較文学、また特に、書物(漢籍)の伝来とともに、中国の学術・文化が古代日本においていかに受容、摂取されてきたのかを明らかにすべく、研究に取り組んでいる。主たる研究対象は、説話や詩文集、仏典を含む各種注釈書など奈良・平安期の漢字・漢文による著作と、漢魏六朝から隋唐に及ぶ中国古典籍との関係であるが、最近は、現代に至るまでの日本における中国学の展開、和文と漢文の歴史的関係、古典籍研究をめぐる日中間の学術交流史などの諸テーマにも関心をもっている。また、朝鮮や渤海なども含め、東アジアの文化・文学・ことばの世界をより広い視点から捉えることをめざし、研究を進めている。
国際日本学コース	児玉 竜一	コダマ リュウイチ	日本の古典演劇、とりわけ歌舞伎・人形浄瑠璃を主たる研究対象とする。近世期から、近現代の伝承にまで範囲は及ぶため、近代の芸能史全般、演劇評論史に及ぶ周辺領域をカバーする。
国際日本学コース	榊原 理智	サカキバラ リチ	My research interests include translation and literary theory, fiction and literary criticism of the postwar Japan with the emphasis on gender and national identity, English translations of Modern Japanese Literature during the occupation and the early cold war periods.
国際日本学コース	嶋崎 聡子	シマザキ サトコ	Satoko Shimazaki's research focuses on early modern Japanese theater and popular literature; the modern history of kabuki; gender representation on the kabuki stage; and the interaction of performance, print, and text. She is the author of Edo Kabuki in Transition: From the Worlds of the Samurai to the Vengeful Female Ghost (Columbia University Press, 2016), which was awarded the 2018 John Whitney Hall Book Prize from the Association of Asian Studies and Honorable Mention for the 2017 Barnard Hewitt Award for Outstanding Research in Theater History from the American Society of Theater Research. She is currently working on a second book project that invokes the body of the actor as the focal point for an exploration of the intersection of kabuki with other media, from woodblock prints to modern sound recording and film.
国際日本学コース	陣野 英則	ジンノ ヒデノリ	平安時代の文学(中古文学)、特に物語文学を主たる研究対象としている。これまで、『源氏物語』の言葉、語り手、話声(narrative voice)、〈書く〉こと、読者、受容などの諸問題について調査・検討を重ねてきた。『源氏物語』以外では『うつほ物語』『堤中納言物語』などを考察の対象とすることが多い。さらに、10世紀後半から11世紀半ばあたりまでに生成・享受された文学全般を包括するような視座からの探究をめざしている。一方、中世・近世の『源氏物語』古注釈の展開に関心を抱き、未翻刻の注釈書の紹介などにも取り組んでいる。また、明治期における「国文学」のあり方についての検討も進めつつある。
国際日本学コース	十重田 裕一	トエダ ヒロカズ	現在、1920年代から50年代の近代日本文学と文化を専門に研究しています。研究テーマは、新感覚派を中心とする日本のモダニズム文学の研究、文学と映画の芸術交流の研究、出版メディアと文学の研究、第二次世界大戦後占領期検閲と文学の研究、近代日本文学における本文の研究など。研究対象とする作家は、横光利一、川端康成、堀辰雄、井伏鱒二、谷崎潤一郎、坂口安吾など。今後五年のあいだに推進予定の研究テーマは、「新感覚派文学の歴史的研究」「総合雑誌における占領期検閲と文学との相互関連性の研究」「出発期「文藝春秋」にみる1920～30年代のマスメディアと文学の展開」などです。

【2020年度研究指導担当教員の専門研究分野】(博士)

(コース別・五十音順)
2019年9月4日現在

コース名	氏名	カナ氏名	専門分野内容
国際日本学コース	由尾 瞳	ヨシオ ヒトミ	My specialty is modern and contemporary Japanese literature, with an interest in translation, canon formation, and literary communities. I have worked extensively on the formation of the field of literature and the publishing industry in early 20th-century Japan, focusing on women writers and feminist literary groups based in Tokyo. I take a comparative research approach that examines Japanese literature as part of world literature. I am also interested in literary translation and have translated works by several contemporary authors.
国際日本学コース	ルーリー ディヴィッド	ルーリー ディヴィッド	David Lurie's research concerns what can be broadly described as "technologies of language." This includes such topics as the history of writing systems and literacy; mythological texts; the comparative history of commentary, lexicography, epigraphy, and other forms of philology; and traditional linguistic thought. His geographical and temporal center of gravity is in premodern Japan, but his interests also include comparative studies and the early modern and modern reception of ancient texts.